

観察者の冒険の始まり

—ニコラス・ボルン『二日目』—

杵 渕 博 樹

Sonderdruck aus:
NISHINIHON DOITSU BUNGAU (GERMANISTISCHE STUDIEN) 36
Herausgegeben von der Japanischen Gesellschaft
für Germanistik-Westjapan
2024

観察者の冒険の始まり

—ニコラス・ボルン『二日目』—

杵 渕 博 樹

序

ボルンは三作の小説を発表しているが、その一作目が『二日目』である。¹⁾ 本作には、ロブ・グリエ作品や、ペーター・ヴァイスの『御者の体の影』に通じる、既存の認知図式の解体を志向する映像的細部描写が多く見られるが、これはディーター・ヴェラースホフ Dieter Wellershoff (1925-2018) やヴァルター・ヘレラー Walter Höllerer (1922-2003) の「新リアリズム」理論に合致するものであり、のちの「新主観主義」的作風を予告するものであった。ただし、さまざまな点で充実の度合いを増していった第二小説、第三小説と比べると、本作の研究史上の評価は高いとは言えない。²⁾ このような事情もあって、本作については、主にその実験的手法に焦点が当てられてきた。

そこで、本稿では、本作の形式上の特性を踏まえた上で、その内容面の再評価を目指す。以下、事実上物語の主人公でもある語り手の〈観察者〉としての人間像を軸に、本作の描く世界について、あらたな解釈を試みる。

1. ボルン作品における〈観察〉

『二日目』発表直後の時期に執筆された詩集『市況』*Marktlage* (1967) は、日常を切り取る簡素で直截的な表現に、同時代批判とユーモアの混じる作風である。『二日目』で目につく、一見ありふれた印象を与える対象の執拗な細部描写や視覚情報の列挙に対応する表現姿勢は、この詩集でも指摘できるが、認識の慣習的図式の相対化を意図するヌーボー・ロマン風、「新リアリズム」風の方法意識が一貫しているとは言えない。

しかし、詩人としてのボルンの代表作と見做されている詩集『発見者の目』*Das Auge des Entdeckers* (1972) に収録された諸作品からは、日常の中に別の世界を「発見」という明確な方針が見て取れる。ときに作者は自らの日常生活の一コマを、ただ無造作に切り取ってきて、簡単に報告しているだけのようにも見えるし、実際そのような作業をあえて印象付けるような表現がなされているわけだが、重要なのはその「切り取り」

1) Nicolas Born: *Der Zweite Tag. Roman*. Köln und Berlin 1965. 以下、本作からの引用、参照指示に際しては、丸カッコ内に頁数のみ示す。

2) 後年のボルンは『二日目』を作品一覧 Bibliographie に含めていなかったという。Anja Sauper: „Die erdabgewandte Seite der Geschichte“ *Die Prosa Nicolas Borns*. Würzburg 1996, S. 20. つまり、作者自身が本作を重視していなかったわけで、このことも、研究史上、本作がいわば習作扱いされがちであることの背景のひとつと思われる。

方である。日常の中に埋もれている特殊な契機を「発見」するために、詩人は、日常生活において知覚されるものすべてに対して、常に注意を払っておく必要がある。つまり、発見者であるためには、観察者でなければならないのだ。この観察から発見にいたる方法論は、『二日目』に顕著な、既存の認知図式を解体することで新たな眺めを獲得しようとする手法の延長上にあると言える。³⁾

この、『二日目』と『発見者の目』に共通する、方法論上「発見」が可能であることを前提にする楽観性は、第二小説『物語の地球からは見えない側』*Die erdabgewandte Seite der Geschichte* (1976) では失われている。⁴⁾ そこでは、現実をありのままに言語化しようとする不可能な試みと、その結果として不可避免的に現実とは異なる世界として形成されてゆく「物語」との緊張関係が一貫したテーマとなり、主人公兼語り手の営みは、不安と苦悩に満ちている。⁵⁾ しかし、観察と言語化の作業そのものは、先行諸作品から継続されていると言える。その成果としての「物語」には、彼が従事するその作業自体も、観察を経て描き込まれている。⁶⁾

第三小説『捏造』*Die Fälschung* (1979) では、戦争報道の現場を舞台に、戦場ジャーナリストである主人公の視点で、現実の忠実な言語化の可能性と限界が問われる。刺激的内容によって読者の期待に応える記事ばかりが往々にして高く評価される実情にもかかわらず、主人公は、あらゆる意味での「捏造」と無縁な（おそらくは不可能な）報道を志向して苦境に陥る。この主人公の葛藤は、彼の個人的資質や私生活と深く絡み合っている。つまり、現実認識と言語表現の関係を巡る問題は、本作では、理念の次元というよりは、職業的实践と実存的苦悩の次元で表現されているのである。主人公は、取材および記事執筆という職業的行為において観察と言語化に従事しているわけだが、同時にその際の職業的要請に規定された自分自身についても、仕事を離れた日常における自己観察の延長上で、省察を続けている。⁷⁾

以上概観したとおり、詩であるか小説であるかを問わず、ボルンの主要作品において

3) Saupe は「距離を置き、バラバラにされた知覚は『二日目』において現実の新たな発見への希望の基盤である」と主張している。Saupe, S. 23. ここで指摘されているのは、『発見者の目』で展開される詩学の萌芽である。

4) Jörg-Werner Kremp によれば『二日目』では「認知することの喜び」が観察作業の原動力となっているのに対し、『物語の地球からは見えない側』の語り手は「独我論的憂鬱」に陥っていると言う。Jörg-Werner Kremp: *Inmitten gehen wir nebenher. Nicolas Born: Biographie, Bibliographie, Interpretationen.* Stuttgart 1994, S. 139.

5) 拙論「生きることで書くことの物語——ニコラス・ボルン『物語の地球からは見えない側』の物語構造——」(『ワセダ・ブレッター』第27号, 2020年, 28-46頁) 参照。

6) Saupe は、『二日目』の語り手の場合には、「経験の破壊よりはむしろ拡大を体験する」ものの、ときに彼の「知覚」は『物語の地球からは見えない側』で詳述される「破壊の知覚に強く類似する」と言う。Saupe, S. 18. 両者に共通するのは、無造作かつ無批判な「経験の知覚」の相対化であり、この作業は、意識的観察の場で実践されるのである。

7) ただし、『捏造』の主人公は暴力的状況の観察者（傍観者）としての苦悶の果てに、ナイフで人を刺すことによって無謀な当事者化を試みる。拙論「『捏造』を巡る闘争としての書く行為——ニコラス・ボルン『捏造』——」(『ワセダ・ブレッター』第18号, 2011年, 3-18頁) 参照。

は、〈意識的な現実観察とその言語化を手段として既存の認知図式を相対化すること〉が重要な主題となり、その精密な表現が一貫して模索されているのである。

2. 作品概要

本作『二日目』では、冒頭で作品の主題が「旅」であることが明かされ、およそ一頁にわたり、それがどのように語られるべきであるかを巡る語り手の見解が示される。その記述は、旅行の支度をしている語り手自身の現在の状況の描写へと連続し、さらに、トランクに詰め込まれる品物が延々と列挙される。この段階ですでに、本作を特徴づける代表的な語られ方のうち、ふたつが提示されていると言える。すなわち、特定のテーマに関する、とりとめのない印象を与える見解表明と、直接的価値判断を排した即物的な状況描写である。

本作におけるもうひとつの特徴的記述形式は、風呂に没かりながら翌日に控えた旅のなりゆきをあれこれ予想する場面（46）や、列車で同席した少年を観察しながら彼の事情を推測する場面（116, 120）等に典型的な、語り手の身体状況を枠組みとして顕在化させつつ思考内容を提示するパターンである。⁸⁾

また、本作は基本的に現在形で書かれており、記憶を再生する言葉が紡ぎだされる現場をそのまま提示するようなスタイルとなっている。そこに、記述内容と語り手の現在との時間的関係を明示するための、回想における過去形や完了形、予測を強調する未来形が挿入される。これは、読者を語り手の現在の身体的状況や視点に密着させ、語り手の体験している時間の推移を追体験させる仕掛けである。

作者自身を思わせる30歳を目前にした男性である語り手は、旅行前日に散歩に出かけ、幼い少女が性的暴行を受ける事件があった現場を通りかかり、捜査する警察関係者と野次馬たちを目にする。その後、彼は下宿に戻って支度を整え、大家である女性に風呂を借り、翌朝列車に乗って出発するが、車中で会った夫婦から招待を受け、森に隣接する彼らの家で一泊する。そもそもこの旅のきっかけは、二人の子どもを抱えた親戚女性から遊びに来ないかと打診されたことであったが、語り手は子守りをさせられることを考えてあまり気が進まず、一応、この親戚宅訪問を念頭に置いてはいるのだが、日程すらはっきりさせておらず、事実上、その場の思い付きで行動している。

作品タイトルにもなっている旅行の二日目、語り手は、招待を受けた夫婦宅の最寄り駅で昼食を済ませたあと列車移動を再開するのだが、夕刻、特に理由もなく見知らぬ町で下車する。深い霧が立ち込めて視界がきかず、駅周辺にホテルなどは見当たらないため、薬局に立ち寄って店員に相談すると、その店員が宿の仲介業者に電話をかけて、部屋を見つけてくれる。

道に迷いながら、重いトランクを引きずってようやく教えられた住所にたどりつくと、

8) 湖での遊泳の場面（101-115）、霧の中をさまよう場面（151-153）でも、それぞれの特徴的な状況に置かれた語り手自身の身体感覚を背景にして、彼の思考内容が展開されている。

出てきた年配の女性に「もう部屋は貸していない」、といったんは断られるが、交渉のすえ、なんとか宿を確保する。その後夕食をとるべく、紹介された近所のレストランを目指す途中、相変わずの霧の中で、老人が轢き逃げされる。語り手は倒れていた被害者を歩道に引き上げ、近隣住民に助けを求め、やがて駆けつけた警察に事情聴取を受ける。その後ようやく食事にありつき、宿に戻って翌朝以降の自分の状況を思い浮かべるところで作品は終わる。

ただし、個々の出来事は、読者がおおよその時系列を復元できる範囲で、頻繁に前後しながら語られる。それぞれの出来事の内部では時間的順序が逆転することはないが、ひとつの出来事が一度にまとめて完結させられるのではなく、何回かに分けて、同様に分割されたほかの出来事についての記述と交互に語られてゆく。⁹⁾ このことに関しては「自分は順序というものが苦手である」(156)という言明もあるため、このスタイルもまた、語る作業において記憶が呼び起こされる経緯をそのまま再現したものであるという設定を反映するものと考えられる。

3. 語り手の他者に対する基本的な構え

語り手は、列車での出発後の場面に先立って、車内で偶然出会う人々との間での会話についての考え方を述べている(12)。彼は相手が何か話したがっている場合には適当に相槌を打って聞いているふりをするが、それもまた「気晴らし」になるのだという。彼は他者との表面的接触、あるいはコミュニケーションの形式的成立への参加を好みながらも、ある意味で相手を欺くことに関して心理的負担を感じることはないようだ。

また、彼は自分から同席者に積極的に話しかけることはしない。列車で正面の席に座った少年を、語り手は繰り返し観察、描写し、その心理を推測するが、対話は最小限であり(12f.)、やはりしばらく同席することになる婦人については、「ンムンム」と絶えず声を漏らしている様子に苛立っており(142f.)、次の停車駅を尋ねられると、知っていたにもかかわらず「知らない」と答えたりしている(146)。

語り手を招待した夫婦との会話でも、相手の意見に内心では相当な違和感を抱きながら、むしろ相手の様子を観察する方に注意を向け、きちんと話の内容を追うことはせず、意見を求められても、曖昧な仕草や、決まり文句めいた相槌や保留でごまかしてしまう。それが、そのような対応の効果を計算した上での自覚的な行為であることも、読者には明かされている(23ff.)。

これらの例からは、無用な対立や想定外の事態をあらかじめ避けようとする姿勢がうかがえる。簡単には相手を信用せず、警戒を怠らない慎重な態度である。語り手には、相手をつぶさに観察しながら自分をことさらに没個性的な存在にとどめ、そうすることで状況をコントロールしようとする傾向があるのだ。¹⁰⁾

9) Saupe は、本作においては「記憶が非連続的に進行するものの、比較的大きな単位では、その基盤となる出来事の順序の再構成は可能」であり、「空間的、時間的構造は比較的明快」と評している。Saupe, S. 18.

4. 自伝的背景と同時代社会

本作は、若い作者の人生経験を規定する出身地域、すなわち、19世紀以来、石炭、鉄鋼など鉱工業を主要産業として繁栄してきたものの、1960年代に入って炭坑の閉山が相次いでいたルール地方の点描、そして、格差と矛盾を伴う、第二次世界大戦後の急激な復興の世相への批判的視線を、内容上、ひとつの特徴としている。

車中で出会う少年に関する記述は何回かに分けて配置され、全体の分量は相当に多く、本作の主要な構成要素のひとつである。語り手は、少年とほとんど言葉を交わさないが、少年が車窓から身を乗りだして手をふったり、パンを取り出して食べたりする様子を観察し、リアルタイムで描写しながら、少年の状況を、〈初めての一人旅で親戚宅を訪問したのち、そこから帰宅する途上〉であろうと推測する。だとすれば、その親戚訪問という事情は現在の語り手も同様である。さらに、語り手は、少年が帰宅したあと、訪問先で会ってきたであろう親戚たちについて、家族に質問攻めにされる様子、また少年がそれに戸惑いながら口数すくなく答える様子を、具体的な会話として提示している(122f.)。

語り手は、この少年を、「いかにもそれらしい少年」¹¹⁾であると称しているが、その一方で、家庭内での会話を生々しく想像してみせるやり方からは、語り手がそう遠くない過去である少年時代の自分自身の体験を参照していることがうかがえる。このことには、語り手の現在の生活拠点が出身地の近郊であり、作品で描かれる旅の移動範囲がルール地方とその隣接地域であるという事情も関係している。¹²⁾ その意味で、語り手は、この本来は他人である少年を媒体として、直接は描写されることのない語り手自身の少年時代について物語っているのである。

語り手は、自らの出自について、母親も、その両親も貧しく、現在の彼も貧しいと述べている(36)。父親への言及はない。そもそも、親戚からの電話をきっかけに訪問を検討する際にも、給料の前借をどう頼んだらいいかを考えるなど、彼は最初に金の心配をしている(38f.)。保険会社からの掛け金の督促状にも言及があり(36f.)、今は払えない、ということで語り手はこれを放置する。また、彼を自宅に招待した夫婦との会話の際、同時代、すなわち1960年代前半の西ドイツの世相についての議論で経済格差と社会福祉の問題が話題となると、商売が軌道に乗っているらしい招待主ジークフリートの自己責任論的主張に対し、語り手は内心反発を覚えている(25)。¹³⁾

10) Saupe は語り手の「他者の期待に応えつつ本当の自分を隠そうとする表面的アイデンティティの制御」に「不安な自己観察が役立っている」と分析し、そのような傾向を「深い人間形成の明らかで完全な欠如」に帰しているが、本稿ではこれを「自覚的観察者が必然的に帯びる特徴」として解釈したい。Saupe, S. 19.

11) „der ganze Junge mit allem Zubehör“ (12)

12) Kremp は、語り手が旅行初日に招待を受けて滞在する家は Sauerland あるいは Bergisches Land に位置すると推定しており、二日目の夜の舞台となる小都市の様子も含めて、「描かれている世界は外的状況からしてルール地方の住民にとってごく日常的なものである」としている。Kremp, S. 126.

13) 語り手の「生成しつつある富裕社会」における「アウトサイダー」性の自覚については Saupe も指摘している。Saupe, S. 14.

語り手の貧しさは、おそらく彼にとって、彼の故郷、ルール地方のさびれゆく炭坑地区においては典型的なものだ。彼の乗る列車が、ある駅に停車し、駅名が放送されるのを聞くと、彼はよその地方からやってきた旅人がそこを訪れる場面を想像して、その様子を詳細に語る。旅人は、炭坑地帯独特の情景を期待するが、駅の周辺には特にそういったものは見当たらない。勝手を知る語り手は、そこに足りないものを補うかのように、炭坑労働者たちを登場させ、その暮らしぶりを素描する。労働者地区の街並みは汚れ、古びていて、子供たちも不潔だ (78-84)。

また、二日目に彼に部屋を貸す未亡人女性は一入暮らしで、ふたりの息子はカナダに移住したと言う。先に触れたとおり、語り手は当初宿泊を断られてしまうのだが、女主人によれば、息子たちがお金を送ってくれるから、もう端金のために部屋を貸す必要がなくなった、という事情だ。これもまた、戦後西ドイツの貧しい一面をあえて描き込むための設定であろう。¹⁴⁾

ただし、語り手は、解決すべき社会問題として貧困について議論することには倦み疲れており、¹⁵⁾「貧困」に起因する「憤激」についてひとしきり皮肉で投げやりな考察を展開したあと (141)、「自分は目下、情けないことに憤激からは離れて生きている」(142)と述べている。だからこそ、本作における「貧困」は、抽象化された一般論においてではなく、むしろ個別の具体的事例として提示されているのである。

5. 性的モチーフ

5-1. 少女暴行事件

すでに触れたように、語り手は少女暴行事件が起こった現場を通りかかる。このエピソードは、二回に分けて語られ、記述の分量からしても、本作において重要な位置を占める。ここで目を引くのは、語り手が、自らを犯人に擬して、その心理を想像していることである。語り手は、自分には特殊な性的嗜好はないとわざわざコメントした上で、犯行とその後の行動を、犯人の視点で再現して見せる (28ff.)。また、犯行自体に関しては確かに感情移入の印象は希薄なものの、その後、警察に追われる身となった状況については、すでに捜査の開始された犯行現場にあえて再び現れる際の緊張感を追体験しようとしている。¹⁶⁾

また、作品の冒頭近く、出発前日の夕刻以降の荷造りの場面から、同日の時間をさかのぼる仕方、やや唐突に語り始められることもあり、つまり、生起の順に頓着せず複

14) 女主人は「夫が生きていれば家族でカナダに移住していただろう」、「戦争未亡人だったらたくさん年金がもらえる」が、夫は四年前の病死で、自分は「戦争未亡人」ではないと語る (188)。

15) 「……でもおれは疲れている。共産主義に対する防波堤のくたびれたコンクリート粒みたいな感じだ。」(140f.)

16) ボルンのはちに小品 *Täterskizzen* で、警察に追われる容疑者を描いているが、そこでも主題は管理社会批判であり、犯罪そのものよりも逃走あるいは潜伏に焦点が当てられている。Nicolas Born: *Täterskizzen*. In: *Täterskizzen. Erzählungen*. Reinbek bei Hamburg 1983, S. 137-150. この点については Saupe も指摘している。Saupe, S. 12.

数の出来事を往還しながら並行して語るスタイルにまだ読者が慣れていない段階で語り始められることもあり、さらに、自分もかつてこの同じ場所で (子どもではないものの) 「少女」と性行為に及んだことがあるなどという不穏な記憶まで語られるため (31f.)、少なくとも最初のうちは、本当に語り手が犯人なのではないか、という疑いを抱かせるような表現効果を伴っている。¹⁷⁾

5-2. 招待を受けた夫婦宅での体験

招待を受け、知り合ったばかりの夫婦の一軒家に滞在した際の体験もまた、複数回 (計7回) に分けて詳しく語られ、捜査現場のエピソード同様、本作において特に大きな存在感を示している。

夫ジークフリートに熱心に誘われ、ふたりで湖に泳ぎに行った語り手は、ひと泳ぎ競争したあと、唐突に水中で腰に抱きつかれる。さらに、驚きのあまり明確な拒絶をアピールできずにいると、笑顔を浮かべたジークフリートは、語り手の尻に「パンツの前面」、すなわち股間を押し付けてくる (110f.)。語り手は、大いに困惑しつつも、冷静を装ってさりげなく距離を取る。その後ふたりの間でその件が話題になることはないのだが、語り手は家に戻ってからもジークフリートの様子に注意を怠らず、警戒し続けることになる (149)。そして翌日の記述においても、夫婦の懇願にもかかわらず語り手が昼食を遠慮して早々に出立しようとする (150f.)、語り手が何度も断ったにもかかわらずジークフリートが駅まで送ってくること (165ff.)、さらには列車の到着まで付き添おうとするのを語り手が駅舎の外に連れ出してまで帰らせること (168-172) によって、例の性的関心を強く疑わせる接触の影響は継続的に想起させられる。(ただし、語り手は一貫して、明確な拒絶を伝えることなく、欲待された客人としての礼にかなうような仕方、内心の動揺を隠し続ける。)

他方で、語り手は当初よりジークフリートの妻ルイーゼに対して性的関心を抱いている。彼女の表情、身体、身のこなしについて詳しく好意的に描写するばかりではなく (20, 58)、湖での水浴が話題になったときには彼女のビキニ姿や裸を想像し (19)、結局ルイーゼが加わらなかったことに失望する (19)。また、ジークフリートに「妻をどう思うか」と尋ねられて戸惑いつつ (63)、夕食時には彼女との密通を期待してさえる (148)。

5-3. 隠されるべきもの・抑圧されるべきものとしての性的願望

これら、〈少女暴行事件〉と〈湖での性的接触〉というふたつの出来事には、性的欲望の一方的発現という共通の構図があり、これらは、語り手の意識、あるいはフロイトの言う前意識において重なり合いうる。後者、すなわち湖での一件において、語り手は被害者の位置にある。また、前者においては、語り手は加害後の犯人の位置に自分を置き

17) Kremp も同様の指摘をしている。Kremp, S. 143.

て、ひそかに犯人を演じている。性的侵犯者は、世間から忌避され、犯罪者として警察から追われ、捕まれば処罰される。しかし、性犯罪の起点となるのは性的欲望であり、それは犯罪を起こさない者たちの、いわゆる「正常な」性的欲望と、完全に異質なものであるかもしれない。この、犯罪あるいは一方的侵犯には至らない性的欲望の事例として、(読者には明かされるが面前の夫婦には隠される)語り手のルイーゼに対する欲望は提示されているのである。

6. 群衆と警察

本作には事件捜査にあたる警察と、集まった野次馬とが対置される構図が二度現れる。それぞれ作品中で主要な位置を占める場面である。語り手は、警察関係者から見て、自分が群衆の中のひとりであることを自覚している。すなわち、群衆の一員として警察組織と向き合っている。

少女暴行事件捜査現場で、語り手は〈犯行現場に再び現れた犯人〉の心理を想像し、野次馬に紛れ込んで警察官とさりげなく接触する緊張感を疑似的に体験しようとする(30ff.)。彼は警官や刑事たちの仕事を観察し、彼らの意識や心理を推測しながら(30f., 33ff.)、自分が怪しまれないよう注意を払っている(31)。というのも、彼はかつてこの同じ場所で、「幼い少女」に対する行為ではなかったものの、「少女」と性交したことがあるからだ(31f.)。彼は近づいてきた警官に被害者の少女について質問し、「怪我はたいしたことはない」と知らされ満足するが、「犯人は必ずつかまえる」と聞いて不安になる(33)。また、ジャーナリズムの訳知り顔の報道は公衆や司法に影響を与えるだろうが、彼はそれに惑わされたくないという(34)。さらに、捜査に当たる警察官と犯人とを、それぞれの「行為」の最中あるいはその後の「空腹」によって同列に並べたり、¹⁸⁾目撃証言の不一致や不確かさを想像したりもしている(74)。これらの背景のもとで、語り手は自らが潜在的な容疑者であること、すなわち、観察主体であると同時に、(警察組織からの)観察対象となりうることを強く意識している。

この警察と群衆からなる構図は、作品後半に配置された轢き逃げ事件後の場面で再び現れる。その際、まず描写されるのは、語り手に呼び鈴を鳴らされ、次々に外に出てくる集合住宅の住民たちの様子である(194)。彼らは先を争って語り手から事情を聞きだそうとし、怪我人にどういった応急措置を取るべきか、それぞれ勝手な意見を述べたてる(195-198)。やがて警察が到着すると語り手は目撃者として事情聴取を受けるのだが、これは、双方のセリフのみから描かれ、奇妙な噛み合わないやり取りとなる(200-205)。というのも、語り手が、自分の体験したこと、想起できることのすべてを、過度に詳細に再現しようとするからである。ちなみに、その説明のほとんどは、この場面に先立つ、実際に語り手が轢き逃げ被害者を発見した際の記述をそっくりそのまま繰り返している。語り手は質問に対して要を得た返答ができず、本題から逸れて頻繁に脱線するため、そ

18) 犯行の再現場面に、犯行後の空腹についての言及がある(30)。

れを警官が遮って話を戻させる、というパターンが繰り返される。これは見方によっては、捜査に非協力的な不真面目な態度でもある。それが意図されたものかどうかは、この場面、およびこの前後の場面だけからははっきりしないが、読者としては少女暴行事件捜査現場での語り手の不安と緊張を想起せざるを得ない。ここでは、徹底的な観察者となるべく、観察結果の言語への定着作業については試行錯誤中の語り手が、その観察者としての本性を露呈しているとも言えるが、それに加えて、あの疑似的に犯人の立場に身を置いたときの気分と構えが、目撃者として事情聴取される際にも、まだ残っていたと考えられる。

語り手は、暴行事件捜査現場では、怪しげな目撃証言や犯人への常識的な憎悪を語る言説に対して明らかに距離を置き、あえて犯人の位置に身を置くが、その際、警察は単なる敵対者ではなく、むしろ、相手に本心を見せずに観察する者同士としてのライバルでもあった。さらに、この文脈に即して言えば、その観察作業において、語り手は自己流の素人であり、警察官は職業的玄人である。語り手は、まず、捜査現場で、野次馬の一人として、警官と通り一遍の接触を果たしたのち、轢き逃げ事件後の場面では、事情聴取対象として、いわば事件の準当事者として本格的に警察と向き合ったことになる。この経緯は、ある種の潜在的願望の実現過程として解釈できる。つまり、語り手は、群衆の一員としてではなく、事件の当事者として、警察権力と関わりたかった、あるいは対決したかったのである。

7. ロマーン的展開

本作の時間的枠組みは、出発前日、旅の一日目と二日目という三日間である。その間の出来事もそれほど劇的なものではなく、すでに触れたとおり、一般的意味での図式化を拒むような細部描写の印象が強いこともあり、ロマーンを自称する長編小説ならではの物語展開に対する期待にわかりやすく応えるような作品ではない。¹⁹⁾しかし、本作の具体的内容を構成する短い期間での比較的地味な事件の連なりは、語り手の半生の記憶と結びつけられながら、その成長過程の縮図となっているのである。

出発前日、下宿人である語り手は、家主の夫が留守のときにはふだんからそうしているように、家主女性の好意で風呂を借りている(43)。そんなとき語り手はその夫のスリッパも貸してもらえ(42f.)。また、すでに述べたように、今回の旅行を計画するにあたって、経済的余裕のない語り手は、まず資金の心配をするのだが、この問題は、未亡人だという家主女性の姉(あるいは妹)がテーブルの上に置いてくれた金であっさり解決してしまう。語り手は「その事情についてはおもしろい話もできるが割愛する」と思わせぶりだ(36, 39)。彼は明らかに家主姉妹にかわいがられている。これらのエビ

19) ジャナル表記によれば本作はRomanであるが、Saupeは「出来事に乏しい」と評し、Krempは「このロマーンでは筋骨きは重要ではない」「虚構図式の伝統において旅が暗示するような、彼(主人公)の成長に通じる、状況からの解放はテーマではない」などとしている。Saupe, S. 11; Kremp, S. 123, 131.

ソードは、現在の語り手の（広義の）性的事情を暗示するものであり、本作主要挿話群における性的モチーフを予告するものでもある。

すでに述べたとおり、語り手は車中で出会う同郷の少年の事情を推測し、なりかわるような視点でこの少年の旅の前後の経験を再現する。その語り方には、前提としての共感があり、語り手はこの少年に自身の少年時代を投影している。

小児性愛嗜好が、思春期の異性への性的関心と執着がその段階で固着したものとしての側面、あるいは未熟な性愛のグロテスクなパロディとしての側面を持つとすれば、少女暴行犯への〈なりかわり〉は、車中で出会う（過去の自分の似姿としての）少年への〈なりかわり〉と共鳴しうる。つまり、暴行事件は、語り手自身が思春期に抱いていたかもしれない、同世代の少女に対する性的侵犯への願望を暗示している。こうして提示された少年への同化と「未熟」な性的妄想の一変奏に続いて、同性からの望まない性的アプローチを拒絶する体験を経て、人妻への性的欲望が赤裸々に明かされることになるわけだが、結局その妄想は実現しない。この経緯は、性的成熟と社会的馴致の過程として解釈しうる。

ところで、本作には語り手の父親についての言及がない。母親に関しては出身家庭の貧困の文脈で触れられる。また、前述のとおり語り手は家主姉妹との関係も目立って良好であり、二日目の宿の未亡人からも一定の信頼を得ることに成功している。自立した大人の女性と、人生を模索している最中の若者の形成する構図は、母と息子との関係を連想させる。²⁰⁾ その意味で、本作は〈母と息子の物語〉であり、〈父不在の物語〉なのである。

語り手が母子家庭で育ったのか、それとも言及を忌避させるような否定的事情があって父親が無視されているのかはわからない。しかし、少女暴行事件捜査現場での警察への屈折した態度や、成功者としての自負をにじませるジークフリートへの反発、また、性的に征服されることの拒絶は、ボルンの伝記的事実とはかくとして、父親的な権威との闘争を暗示する。エディプス・コンプレクスを典型的に表象するような事件こそ語られないものの、本作には、その変奏として読み取られうる情景が描き込まれているのである。

このような読解の延長上では、作品終盤で交通事故に遭う高齢男性は、排除・克服されるべき語り手の〈不在の父〉の代替物・等価物にも見えてくる。〈息子〉は、恐るべき〈父〉と対決するかわりに、弱った〈父〉を救護することでその脅威を克服するのだ。

8. 解放された新たな日常へ

旅とは一般に日常からの一時的離脱である。ましてや目的地のない旅ともなれば、日常からの逃避としての意味が際立つ。勤め人である語り手の場合、それは、日々の労働のルーティンワークから解放されて、観察作業、および、その観察結果の言語への定着

20) 語り手も家主の面倒見の良さに「母」を感じている（45）。

作業に専念できる場であり、それがまさに旅における日常となる。

本作は、その旅が始まって間もない時点で終わり、旅の継続が示唆される一方で、目的も期限も予告されない。この、さしあたりあてもなく終わりもない〈観察者〉の旅は、職業作家の人生のアナロジーでもあり、作者ボルンの伝記的事実を反映している。

他方で、語り手の観察者性・傍観者性は、他者との非表面的な接触への躊躇いでもあり、それは、エディプス・コンプレクスに起因する自らの暴力性・攻撃性への不安とその抑圧として解釈できる。²¹⁾ 霧で視界が利かない中、轢き逃げによって老人が負傷するという出来事においては、加害者の姿が隠されていることによってなお一層、父親的な存在の権威の失墜と無能力化という「成果」だけが際立ち、主体的闘争がもたらしていたはずの罪悪感なしに、語り手の願望を充足させる状況が生じていたと言える。

本作の末尾は、二日目の夜を起点として一貫して未来形で語られるのだが、この、翌朝、すなわち三日目の朝以降を予見する情景描写は、奇妙な多幸感に満ちている（208ff., 213ff.）。本作がたどってきたむしろ不安と緊張を基調とする状況から一転、何の憂いもない旅が永遠に続くかのような記述だ。この幕切れは一見唐突であり、謎めいている。しかし、あの老人救護が、〈倒された父〉に対する〈息子〉の優位を確認する行為だったのだとすれば、そしてそれが本作で象徴的に展開された成長物語の到達点であり、語り手の人生における画期となったのだとすれば、それが警察による聴取とともに、観察者性を補う当事者化体験として、彼に一種の達成感と心理的解放をもたらしたとしても不思議ではない。

結論

本作の語り手は、無害で目立たない良識的市民を演じながら、〈観察者〉としての自分の本性を隠して他者を観察している。彼が観察する対象となる人物や情景は、作者自身もまたそれに属するところの、作品成立の同時代、すなわち1960年代前半のルール地方の社会的現実の一部である。語り手はそこで自分の置かれている経済的な位置を強く自覚している。彼は、自身の貧しい出自を背景に、西ドイツの経済復興に対して疎外感を抱いている。それを起点とする彼の視線には、社会の現状に対する批判的ニュアンス、あるいは基調としての敵意と反感が付きまとう。彼の視点は、現場の生活者のそれであって、距離を取って外部から眺める者のそれにはなりえない。

〈観察者〉としての基本姿勢、すなわち、自身の内面を隠して、観察対象から自分が正確に観察されることを妨げ、相手に対する一方的観察を徹底的に遂行しようとする姿勢は、主要エピソード群に顕著な性的モチーフにおいて先鋭化する。他者の領域に対する侵犯行為への興味関心と自己の領域が侵犯されることへの警戒および嫌悪とが表裏一体となった対人戦略の自覚的追求は、良識的市民の常識的態度のパロディであり、それは

21) この自らの暴力性の発現と回避を巡る問題は、第二小説『物語の地球からは見えない側』の主人公を、私生活上の問題からの（文字どおりの）「逃避」へと駆り立て、第三小説『捏造』の主人公を、解決の試み（ナイフでの刺傷行為）へと追い詰める。

破壊的逸脱の危険性をも孕んでいる。暴行事件捜査現場における群衆と警察関係者からなる情景には、性的欲望・性的行為一般と監視・抑圧機構との関係が透けて見える。そこでの語り手の、潜在的容疑者としての疑似当事者化は、性的モチーフの強調と相俟って、観察に徹する者の、一般的な意味における反社会性、あるいは反体制的な批判的傾向を印象付けている。

また、列車内で出会う同郷の少年との、観察を通した同化、すなわち思春期の疑似的な追体験に始まり、少女暴行犯への想像上の〈なりかわり〉、望まない性的アプローチによる被害体験、見知らぬ女への性的関心の自己描写を経て、轢き逃げされた老人の救護へと至る、ささやかな冒険の経緯は、語り手の「成長」を象徴的なものとする、いわば凝縮された「教養小説」的筋書きでもあった。

『二日目』は、実験的処女作としての評価を超えて、〈観察者〉を基点とする物語構造、〈観察者〉の当事者化を巡る問題設定、それらと絡み合う社会批判、および性と暴力のモチーフによって、その後のボルン作品において決定的な役割を果たすことになる諸要素の萌芽を既に網羅的に備えており、そこに読み取られうる、語り手の「冒険」と「成長」の物語は、後に続く〈観察者〉たちの旅路を予告していたのである。

Zu Beginn des Abenteuers eines Beobachters

—Der zweite Tag von Nicolas Born—

Hiroki KINEFUCHI

An Nicolas Borns erstem Roman *Der zweite Tag* wurde bisher vor allem sein methodischer Charakter, der unübersehbar durch den Nouveau Roman von Robbe-Grillet und den Neuen Realismus von Dieter Wellershoff sowie Walter Höllerer geprägt ist, beachtet und erörtert. Dagegen sind der Inhalt der erzählten Welt und die Eigenschaften des Ich-Erzählers als Figur noch kaum Gegenstand genauerer Analysen geworden.

Die präzise Betrachtung des eigenen alltäglichen Lebens und seiner Umgebung, durch die die gewöhnliche, erstarrte Wahrnehmung relativiert wird, kennzeichnet alle Ich-Erzähler und Protagonisten der Romane Borns. Ein solcher Betrachter ist prinzipiell geneigt, sich von der Außenwelt zu distanzieren und sein Inneres vor anderen zu verbergen. Dies gilt auch für den Erzähler von *Der Zweite Tag*.

Eine Art Feindseligkeit des betrachtenden Erzählers gegen die gegenwärtige Politik und Gesellschaft steht im Zusammenhang mit seinem Bewusstsein der Entfremdung: Der Erzähler erwähnt die Armut als Kind im Leben mit seiner Mutter und schildert die Landschaft des untergehenden Kohleabbaus in seiner Heimat im Ruhrgebiet, wo trotzdem eher die reich und fein wirkende Oberfläche des Stadtzentrums auffällt. Die fälschende Oberfläche des rasanten Wiederaufbaus in der Zeit des sogenannten Wirtschaftswunders nach dem Krieg erweist sich als ein Gegenstand zum Entlarven. Diese zeitkritische Betrachtungsweise resoniert mit der oben erwähnten Relativierung des gebräuchlichen Musters des Wahrnehmens.

Am Tag vor seiner Abreise trifft der Erzähler bei einem Spaziergang auf eine schaulustige Menschenansammlung und die Polizei am Tatort eines sexuellen Verbrechens an einem Mädchen. Er stellt sich die Angst und Spannung des flüchtenden Täters vor, wenn dieser am Tatort wieder auftauchen würde. Am ersten Tag seiner Reise wird der Erzähler von einem Ehepaar, das er im Zug kennengelernt hat, eingeladen und besucht ihr Haus, wo er übernachtet. Beim Schwimmen im See erfährt der Erzähler merkwürdige Körperberührungen von dem Gastgeber, die er als homosexuelle Liebkosungen deuten muss, und entzieht sich diesen verwirrt. Andererseits wirft auch er selbst sexuell verlangende Blicke auf die Frau des Gastgebers. Am zweiten Abend der Reise ist er zufällig bei einem Verkehrsunfall anwesend. Im dichten Nebel ohne Sicht hört er ein Auto herankommen, ein Knirschen und dann einen dumpfen Knall. Nachdem er einem alten Verletzten geholfen hat, wartet er mit den Nachbarn auf die Polizei, von der er als Zeuge verhört wird.

Die erste und die dritte der angeführten Episoden haben die Figurenkomposition gemeinsam, die aus der Polizei und der Masse besteht. Am Tatort spricht der Erzähler, der in seiner Einbildung die Rolle des Täters einnimmt, einen mit der Fahndung beschäftigten

Polizisten als einer der Neugierigen an. Er scheint nicht damit zufrieden zu sein, einer der Unbeteiligten zu bleiben: Eine imaginierte Rivalität mit der öffentlichen Macht verführt ihn zu einer Herausforderung und dem methodischen Abweichen von der eigentlichen Einstellung zum „Betrachten“. Durch die Nothilfe an dem Verletzten gelingt dem Erzähler die Beteiligung an einem Vorfall und er kann nun als ein Beteiligter der Polizei gegenüberreten. Das Verhör verläuft jedoch aus Sicht des Polizisten nicht problemlos, denn der Zeuge verliert sich immer wieder in Details und konzentriert sich nicht auf die Kernpunkte: Trotz seines Beteiligtseins bleibt der Erzähler letztendlich in der sprachlichen Darstellung doch konsequent „Betrachter“. Man kann aus diesem Verlauf die „Rivalität“ und „Herausforderung“ herauslesen.

Wie bereits erwähnt fallen in den Hauptepisoden dieses Romans sexuelle Motive auf. Oberflächlich stehen sie in keinem Zusammenhang miteinander. Aber sie verteilen sich systematisch in einer zeitlich verkürzten Abfolge, die analog zur körperlichen Reifung und Sozialisierung des Erzählers konstruiert ist. Bald nach dem Beginn des Werkes begegnet der Erzähler im Zug einem Jungen, der allein fährt, und sieht sich selbst in ihm. So werden die Leser an seine Kindheit herangeführt. Wenn man die Pädophilie eines Kinderschänders als einen erstarrten sexuellen Trieb der Pubertät interpretiert, dann lässt sich das berichtete Verbrechen mit einer möglichen sexuellen Entwicklungsstufe des Erzählers assoziieren. Auch der homosexuelle Versuch des Gastgebers und das eigene verborgene und nicht verwirklichte sexuelle Verlangen des Erzählers nach der Gastgeberin können in diesem Kontext als die folgenden Stufen einer sexuellen Reifung gedeutet werden.

Über den Vater des Erzählers erhält man keine Information, anders als über die Mutter. Das lässt darauf schließen, dass die Beziehung zwischen dem Erzähler und seinem Vater besonders negativ ist oder der Sohn seinen Vater überhaupt nicht kennt. Darüber hinaus treten mehrere Quasi-Mütter auf. Als junger Mieter versteht der Erzähler sich auffallend gut mit der Vermieterin. Ihre verwitwete Schwester gibt ihm aus einem ungenannten Grund Geld für die Reise, den der Erzähler zwar erklären kann, aber nicht verraten will. Weiterhin gibt es die alleinlebende Wirtin eines Zimmers in einer fremden Stadt, in dem er in der zweiten Nacht der Reise übernachtet. Sie hat zwei erwachsene Söhne, die beide bereits selbständig in Kanada leben und ihr Geld schicken. Der Vater der Söhne ist vor vier Jahren gestorben. Wenn man diese Betonung des Vaters eben durch dessen Abwesenheit und die oben festgestellten Andeutungen der sexuellen Reifung gemeinsam in Betracht nimmt, dann wird es möglich, die Nothilfe an dem Alten beim Verkehrsunfall als den Höhepunkt eines ödipalen Abenteuers anzusehen: Die Angst vor dem abwesenden Vater überwindet der Sohn durch die Rettung des ohnmächtigen Alten als Ersatz für den Vater. Mit dieser Deutung ließe sich der plötzliche euphorische Wandel des psychischen Zustands des Erzählers, der sich kurz vor dem Ende des Werks vollzieht, wenn der Erzähler äußerst optimistisch auf den kommenden Verlauf der Reise in den nächsten Tagen blickt, erklären.